

# 世代間コミュニケーションとしての家族の団らんに関する研究

正岡さち\*・飯塚智子\*\*

SACHI MASAOKA\*, TOMOKO IITSUKA\*\*

A study on Family-Communications as Intergenerational Communication

## はじめに

家族は、社会の中で最も小さな単位の集団であるとされる。近年、核家族化が進んだ日本においても、次世代を生育する場としての家庭は、複数の世代から構成される集団であり、人はその中で、生活の方法だけでなく、人間関係やコミュニケーションの方法等を学んでいく人生で最初の場であると言える。しかし、近年、核家族化、共働き家族の増加、家族の生活時間帯のずれ違いなどにより、一家団らんの時間は減少してきていると言われている。

団らんとは、広辞苑によると「集まって睦みあうこと」、「親密で楽しい会合」という意味で使われている。しかし、直接的な「団らん」という行為はなく、その捉え方は人によって様々であるため、定義することは難しいのが現状である。

戦後の日本の住宅は、生活の洋風化に伴って個人のプライバシー重視が進み、欧米の間取りを取り入れた、家族が共有する公室と個人が専有する私室が分離した公私分離型が主流となった。公私分離型では、どちらかに傾くのではなく、団らんとプライバシーの両面のバランスを取る必要があるとされる。しかし、日本においては、プライバシーを重視しすぎる傾向が出て、1980年代には『子ども部屋不要論』まで叫ばれるようになり、改めて、家族の交流である団らんや団らん空間の活用が見直されることともなった。

近年、家族の交流に関する研究は様々な角度から行われている<sup>(1)~(8)</sup>。その中でも、北浦の研究<sup>(2)</sup>によると、コミュニケーションではその場面における会話の有無がその成立と大きく関わっており、それに対して団らんでは、会話の有無よりも同じ場所にいることや、その場の雰囲気の良いさが重視されていることが示されている。一方、既往の研究<sup>(9)~(11)</sup>から、約20年前に比べて団らん観が大幅に広がり、家族は場を共有するだけで団らんと捉えられるようになってきているということ、また団らん観がコミュニケーションに近づきつつあるということが明らかになった。これらのことを背景として、家族が交流を図る機会をできるだけ多くするために、今日では計画の面から様々な工夫がなされるようになってきている<sup>(12)</sup>。実

際、本間らの研究<sup>(4)</sup>では、親子が常時密接に関わる可能性が高い間取りが近年増加していることが明らかになっているという報告もなされている。

このように、近年、家族の団らんやコミュニケーションが改めて注目されているにもかかわらず、コミュニケーション及び団らんの捉え方について詳細に分析したものや、団らん意識と個人のプライバシー意識の関連、団らんと団らん空間の関わりを分析したものはほとんど見当たらない。

以上のことから、本研究では、団らんとコミュニケーションの捉え方の違いを明らかにした上で、団らんとプライバシーのバランスを考慮した望ましい団らん空間のあり方を検討するための基礎資料とすることを目的として調査研究を行った。その結果をここに報告する。

## 1. 調査概要

### (1) 調査方法及び調査期間

調査方法は質問紙によるアンケートで、世帯の代表者1名が記入する世帯票と、18歳以上の家族全員が記入する個人票の2種類を作成した。世帯票は、家族構成や住宅の概要、リビング及び個室の状況などを問うものである。個人票は、団らん及びコミュニケーションの捉え方、プライバシーについての意識、求められる団らん空間とその使い方などについて個人の意識を問うものである。

調査対象は、松江市内の一戸建て住宅に住む居住者、調査期間は2005年11月上旬～中旬である。配布及び回収は、原則として直接配布・直接回収で、配布世帯数は351部、世帯票は回収部数195部、回収率55.5%であった。個人票回収部数は332部である。

### (2) 語句の定義

本報告においては、下記のように語句を定義し、使用することとする。

- LDK (リビング・ダイニング・キッチン)・・・住宅が計画される際、設計側が意図した平面計画上の表示
- 団らん空間・・・実際にその家庭で団らんが行われている空間

\* 島根大学教育学部人間生活環境教育講座

\*\* 元島根大学教育学部学生

表1 対象世帯の概要 \*人数( )内は%

家族構成	夫婦のみ 94(28.3)	夫婦と子 195(58.7)	三世代 15(4.5)	独身 1(0.3)	その他 24(7.2)	不明 3(0.9)
家族人数	2人以下 112(33.7)	3人 82(24.7)	4人 92(27.7)	5人 28(8.4)	6人以上 10(3.0)	不明 8(2.4)
世帯主 年齢	30歳未満 1(0.3)	30歳代 45(13.6)	40歳代 96(28.9)	50歳代 102(30.7)	60歳以上 63(19.0)	不明 25(7.5)
世帯主 職業	会社員 122(36.7) パート・内職 1(0.3)	公務員 102(30.7) アルバイト 6(1.8)	団体職員 17(5.1) 無職 17(5.1)	農林漁業 2(0.6) その他 6(1.8)	自営業 6(1.8) 不明 50(15.1)	自由業 3(0.9)
妻年齢	30歳未満 7(2.1)	30歳代 56(16.9)	40歳代 116(34.9)	50歳代 95(28.6)	60歳以上 34(10.2)	不明 24(7.2)
妻職業	会社員 29(8.7) パート・内職 66(19.9)	公務員 20(6.0) 専業主婦 115(34.6)	団体職員 19(5.7) アルバイト 4(1.2)	農林漁業 2(0.6) 無職 18(5.4)	自営業 6(1.8) その他 14(4.2)	不明 39(11.7)
子ども 人数	0人 89(26.8)	1人 87(26.2)	2人 102(30.7)	3人以上 32(9.6)	不明 22(6.6)	
長子年齢	5歳未満 15(4.5) 不明 138(41.6)	5～13歳 未満 64(19.3)	13～16歳未 満 16(4.8)	16～20歳未 満 40(12.0)	20歳代 45(13.6)	30歳代 14(4.2)
末子年齢	5歳未満 19(5.7) 不明 205(61.7)	5～9歳 未満 34(10.2)	9～13歳 未満 26(7.8)	13～16歳 未満 10(3.0)	16～20歳 未満 8(2.4)	20歳以上 30(9.0)

表2 個人票部分の回答者の属性 \*人数( )内は%

性別	男性 139(41.9)	女性 191(57.5)	不明 2(0.6)				
年齢	18～20歳 未満 6(1.8)	20歳代 25(7.5)	30歳代 58(17.5)	40歳代 102(30.7)	50歳代 86(25.9)	60歳以上 47(14.2)	不明 8(2.4)

表3 住戸の概要 \*人数( )内は%

所有形態	持ち家 323(97.3)	借家 5(1.5)	不明 4(1.2)				
居住年数 (年)	3未満 56(16.9)	3～5 未満 104(31.3)	5～10 未満 15(4.5)	10～15 未満 20(6.0)	15～17 未満 35(10.5)	17以上 98(29.5)	不明 4(1.2)
築年数 (年)	3未満 49(14.8)	3～5 未満 105(31.6)	5～10 未満 9(2.7)	10～15 未満 21(6.3)	15～17 未満 36(10.8)	17以上 104(31.3)	不明 8(2.4)
階数	1階 5(1.5)	2階 321(96.7)	3階 2(0.6)	不明 4(1.2)			
LDKの タイプ	LD+K型 98(29.5)	L+DK型 54(16.3)	LDK型 148(44.6)	L+D+K型 18(5.4)	その他 6(1.8)	不明 8(2.4)	
LDK以外 の部屋数	3未満 38(11.4)	4 114(34.3)	5 125(37.7)	6以上 29(8.7)	不明 26(7.8)		

(3)調査対象者の属性と対象住宅の特性

まず、対象世帯の概要についてみると(表1)、家族構成は、夫婦と子の世帯が58.7%と多くを占めている。家族人数は2人以下が最も多く、平均3.2人である。世帯主の年齢は、50歳代が最も多く、40歳代、60歳以上と続く。子ども人数は2人が30.7%と最も多く、平均は1.3人である。

個人票の回答者の属性(表2)は、性別は、男性41.9%、女性57.5%で、平均年齢は46.6歳であった。

対象者が居住する住戸の概要を表3に示す。

所有形態(表3)は、持ち家が97.3%で、全体のほとんどを占めている。居住年数は、3~5年が31.3%と最も多く、築年数も、3~5年が31.6%と最も多い。住戸は、2階建てが96.7%で、全体のほとんどを占めている。LDKのタイプは、LDK型が44.6%と最も多く、LD+K型、L+DK型と続く。LDK以外の部屋数は、4部屋、5部屋が多く、平均部屋数は4.5部屋である。

2. 結果及び考察

(1)団らんに使用する空間

家族が集まって団らんをする空間について該当するもの全てに回答してもらった結果を図1に示す。リビングが81.4%と最も多いが、ほぼ半数の家庭がダイニングも回答しており、ダイニングを団らん空間として捉えている家庭も多いことが伺える。

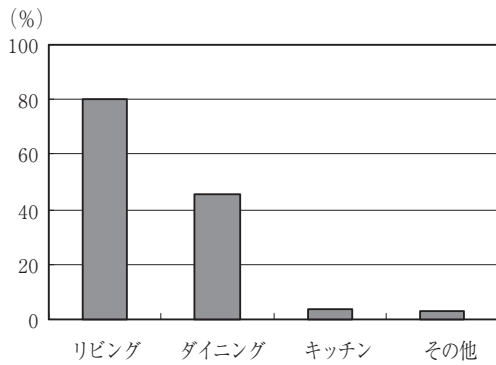


図1 家族の団らんに使用されている空間

(2)団らんの実態

① 団らん合計時間

団らん合計時間を尋ねたところ、図2に示すように、平日の団らん合計時間の平均は2.0時間であった。約20年前の約20年前の太田らの研究<sup>(9)</sup>と比較すると、平日の団らん合計時間はほとんど変わらない結果となった。一般的には、以前に比べて団らん時間は減っていると言われている。例えば、水野谷の生活時間調査<sup>(13)</sup>によると、平日の団らん時間は約1.08~1.14時間となっており、本調査は約2倍の時間である。以上のことから、「団らん」の捉え方が変化しており、以前は団らんとは考えられていなかった状況まで団らんと認識するようになったことが理由ではないかと推測される。なお、休日の団らん合

計時間の平均は4.1時間であり、平日の2倍以上となっていた。

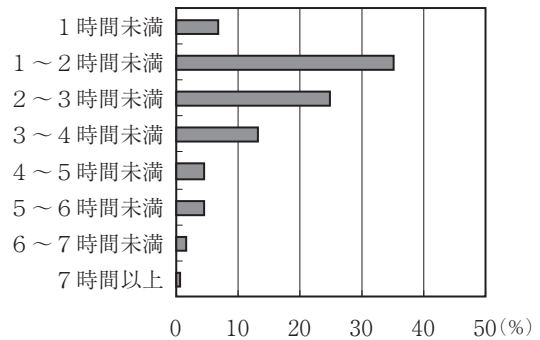


図2 平日の団らん合計時間

② 団らん時に行う生活行為

団らん時の生活行為について該当するもの全てに回答してもらった結果を図3に示す。テレビなどを見るが94.1%と最も多く、話をする、食事をする、お茶・お酒などを飲むと続く。その一方で、休息する、本・雑誌を読むといった私的な行為や、さらには、家事をする・勉強をする・仕事をするといった、余暇的・趣味的とさえ言えない生活行為もあがっている。生活行為はいくつか並行して行うことが可能である。家族が集まった団らん時には団らん以外の生活行為も同時に行われているため、団らんとは思われられないような生活行為も含まれていると考えられる。太田らは、特に主婦は団らんに家事を行いながら参加しているとし、これを“ながら参加”と位置づけた<sup>(11)</sup>が、主婦だけでなく、家族全員がそれぞれ「個別の行為」をしながら団らんに“ながら参加”をしている状況が伺える。

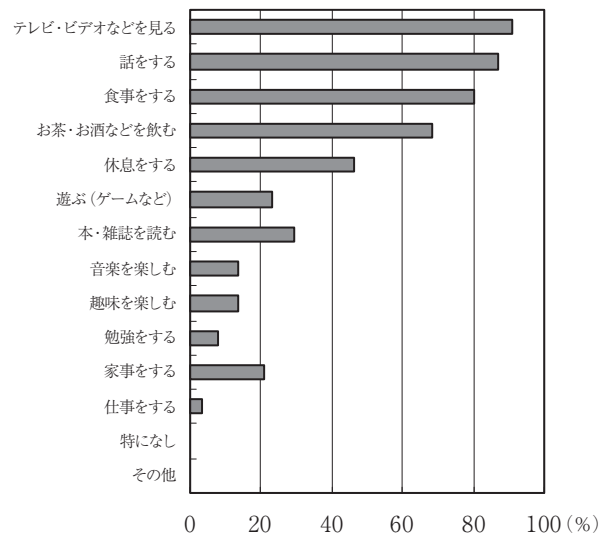


図3 団らん時の生活行為

(3)団らん観とコミュニケーション観

そこで、団らんがどのように捉えられているのかを把握するため、18項目にわたる状況をあげて団らんとする

か思わないかを回答してもらった。この概念は行為だけでなく、相手、場所、会話の有無によっても捉え方が異なると考え、様々な状況の項目を設定した。また、団らんとコミュニケーションの違いをみるために、同じ18項目についてコミュニケーションと思うかどうかについても回答してもらった。両者を比較した結果を図4に示す。

団らんとコミュニケーションの捉え方をみると、「家族全員がリビングでテレビを見ながら談笑する」や「家族全員で夕食をとる」は団らん、コミュニケーションと思う割合がともに90%以上を占めている。それに対して「父親の帰宅前に、母親は料理をして子どもたちはテレビを見ている」「家族全員で黙ってテレビを見る」などは団らん、コミュニケーションと思う割合がともに30%程度と低くなっている。

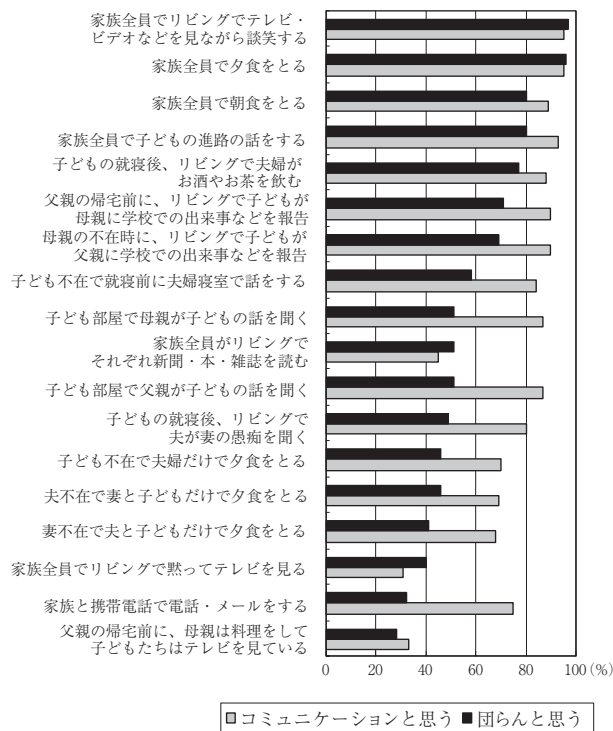


図4 団らん観とコミュニケーション観

「家族全員で子どもの進路の話をする」のように、やや深刻な雰囲気の状態でも約80%が、「子ども不在で就寝前に夫婦寝室で話をする」は団らん空間ではない空間で夫婦のみの状況であるが60%近くが、また「家族全員がリビングでそれぞれ新聞・本・雑誌等を読む」は、会話が無く、場を共有しているだけでも関わらず半数以上が、団らんとして認めている。この団らん観について、約20年前の太田らの研究<sup>(9)</sup>と比較可能な項目を比較すると、どの項目も団らんと捉える割合が高くなっている。対象地や対象者が異なるため正確な比較は難しいが、それを差し引いても、今回の調査では、団らんをかなり広く捉えていることが伺える。以上のような結果から、団らんと捉えられる状況が、以前に比べて非常に広がってきているのではないかと推測される。

それでは、コミュニケーションとはどのように認識されており、団らんとどういった点が異なるのであろうか。コミュニケーション観について団らん観と比較して見ると、ほとんどの項目で、コミュニケーションと思う割合が団らんと思う割合よりも高くなっており、団らんはコミュニケーションに大部分が含まれる形で認識されているのではないかと推測される。団らんとする割合とコミュニケーションと思う割合の差が大きい項目についてみると、「家族と携帯電話で電話・メールをする」「子ども部屋で母親が子どもの話を聞く」「子ども部屋で父親が子どもの話を聞く」「子どもの就寝後、リビングで夫が妻の愚痴を聞く」などであった。逆に、団らんとコミュニケーションの差が小さかったり、コミュニケーションと思う割合の方が低い項目は、「家族全員でリビングで黙ってテレビを見る」「家族全員でリビングでそれぞれ新聞・本・雑誌を読む」「父親の帰宅前に、母親は料理をして子どもたちはテレビを見ている」などであった。以上のことから、団らんでは会話の有無といった意思の伝達よりも家族の全員または大半がそろうことや場の共有が優先されており、コミュニケーションにおいては、必ずしも家族全員がそろわなくてもよく、また場の共有もそれほど重視されないが、行為の共有や会話などによって互いに意思を伝達し合うことがその成立と大きく関わっていると考えられる。

以上の結果から、団らんの捉え方は以前に比べて広がってきており、コミュニケーションに近くなっていると考えられる。しかし、それでも、団らんとコミュニケーションは異なって捉えられており、その違いは、団らんでは、家族がそろうこと、行為の共有、場の共有がその成立に関わっていると考えられる。一方、コミュニケーションでは、会話や行為の共有による意思伝達があることがその成立に関わっていると考えられる。

(4) 団らん満足度

次に、団らんの合計時間つまり団らんの量に対する満足度と、団らん時の生活行為等つまり団らんの質に対する満足度を尋ねた結果を図5に示す。ともに、半数以上の人が現状に満足しており、不満を感じているのはどちらも約10~15%程度であった。

これらの満足度どうしの関係を見ると(図6)、団らんの量に対して満足している人は、団らんの質に対して

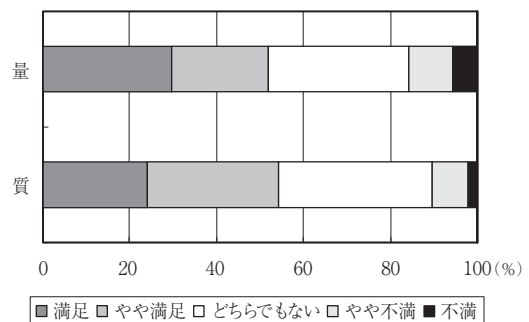


図5 団らん満足度



も満足しており、逆に団らんの量に不満な人は団らんの質に対しても不満である傾向があり、団らんの量と質に対する満足度の間には相関関係があるといえる。

なお、コミュニケーションの量と質の満足度及びそれぞれの関係についても検討したところ、団らん満足度と同様の傾向にあり、団らん満足度とコミュニケーション満足度は非常に似通っているといえる。

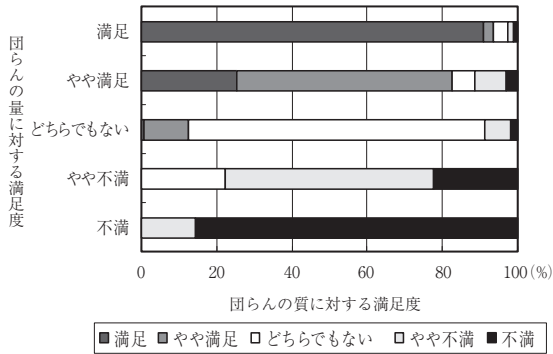


図6 団らんの満足度の量と質の関係

(6) プライベートな時間の満足度

図7に示すように、家庭内での家族全体のプライベートな時間に対する満足度をみると、6割以上の人々が現状に満足していることがわかる。

家庭内でのプライベートな時間に対する満足度と団らんの量に対する満足度との関連をみると、家庭内でのプライベートな時間に満足している人は、団らんの量にも満足しており、逆に家庭内でのプライベートな時間に対して不満な人は、団らんの量に対しても不満であることから、団らんとプライバシーの満足度の間には相関関係があるといえる。プライベートな時間に対する満足度と団らんの質、プライバシーの質の満足度と団らんの量や質、また、家庭内でのプライベートな時間に対する満足度やプライバシーの質の満足度とコミュニケーションの質や量の満足度との関係においても関連が認められた。

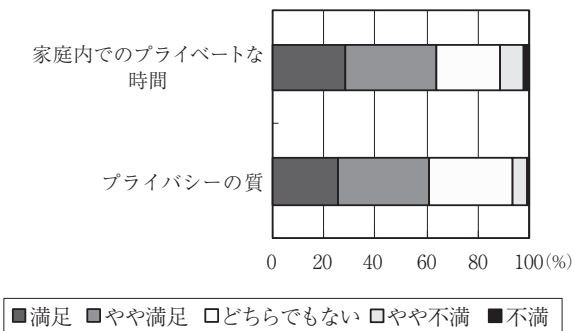


図7 プライベートな時間の満足度

(5) 団らん及びコミュニケーションによって得るもの

団らん及びコミュニケーションによって得るものについて図8に示す。コミュニケーションでは団らんよりも家族の絆が多く、団らんではコミュニケーションよりも楽しいひとときが多くなっている。

団らんでは場の共有が優先されること、コミュニケーションは意思の伝達が重要視されること、また、北浦が指摘するように団らんは場の雰囲気が良いことが求められること<sup>(2)</sup>などを重ね合わせると、団らんではよい雰囲気家族が仲良く楽しむことによって相互理解を得ており、コミュニケーションでは会話などによる意思伝達により家族間の相互理解を得、その結果家族の絆を深めるという役割をしていると考えられる。

家庭内における家族の交流と個人生活の尊重は両輪の輪とも言われ、どちらが欠けても、またどちらかに傾きすぎてもよくないとされ、以上のような結果から、そのことが生活者にも認識されていることが伺える。また、この理論を平面化したのが公私室型であるが、住宅平面上で計画されていたとしても、実際に居住者が適切な空間の使い方をしなければ意味がないことも、外山によって指摘されている<sup>(15)</sup>。そこに住む家族の交流と個人生活の尊重のバランスをとるためにも、家族共有の団らん空間と個室の使い方のバランスを上手に取ることの必要性が求められると言えよう。

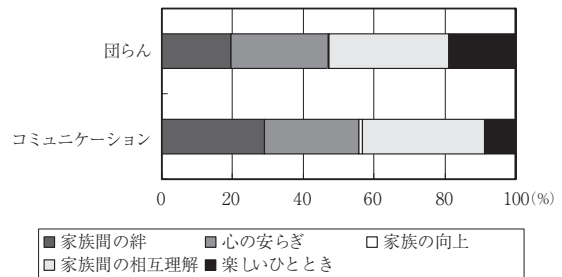


図8 団らん及びコミュニケーションによって得るもの

(6) 求められる団らん空間像

求められる団らん空間像について尋ねた結果を図9に示す。団らん空間と食事空間、キッチン、個室にはつながりがある方がよいと考える人の割合は高く、家族の気配がわかる空間を望む傾向が伺える。これを、長子年齢

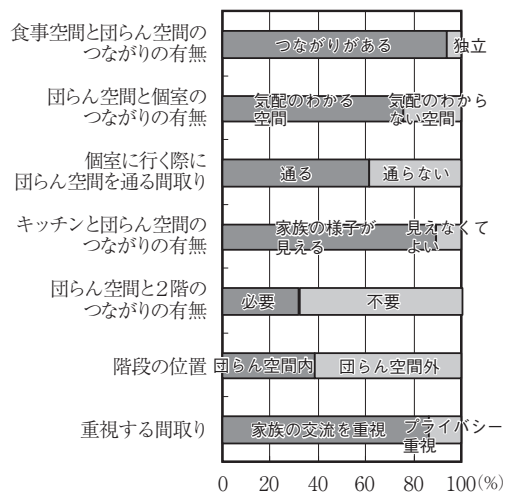


図9 希望する団らん空間像

別に見てみると、図10、図11に示すように、低年齢の子どもがいる程、個室と家族共有の空間のつながりを求める割合が高い傾向にある。開かれた空間を後から閉じることは、様々な工夫などで行うことが可能であるが、閉鎖的な空間づくりをしてしまうと、それを開放的にすることは難しい。家族の交流を重視したいと考える場合は、前もって、開放的で住宅全体につながりを持たせた計画をすることが必要であるといえよう。

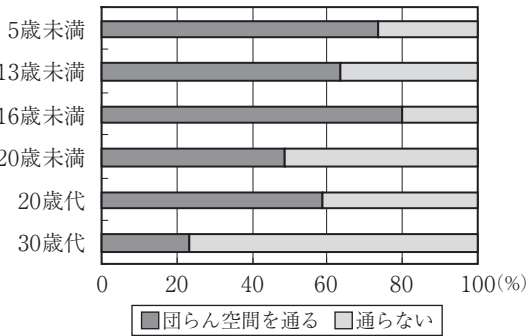


図10 長子年齢別にみた個室に行く際に団らん空間を通る間取りの希望

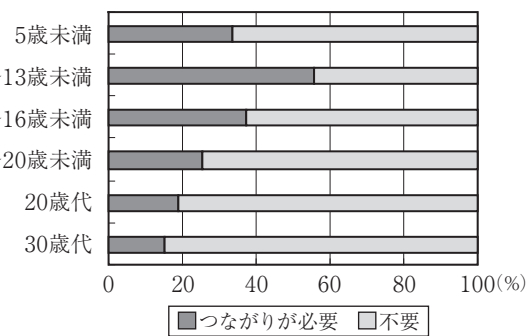


図11 長子年齢別にみた団らん空間と2階のつながりの有無の希望

## おわりに

本調査によって得られた結果を要約すると、下記のようなになる。

- (1) 平日の団らん合計時間の平均は2.0時間であり、約20年前とほとんど変わらず、また、最近の生活時間研究よりかなり長く捉えられていた。
- (2) 団らん時の生活行為は、テレビなどを見る、話をする、食事をする、が多かったが、その他に、私的行為から家事行為までかなり多岐にわたった行為があげられた。このことから、団らんにはそれぞれがそれぞれの「したいこと事」をしながら“ながら参加”をしている状況が伺えた。
- (3) 団らん観・コミュニケーション観を見ると、団らんの捉え方は以前に比べて広がってきており、コミュニケーションに近くなっていると推測された。しかし、それでも、団らんとコミュニケーションは異なって捉えられており、団らんでは、家族の大部分または全員が

そろそろこと、行為の共有、場の共有、場の雰囲気が良いことがその成立に関わっていると考えられた。一方、コミュニケーションでは、行為の共有や会話による意思伝達があることがその成立に関わっていると考えられた。

- (4) 団らん満足度やプライバシーの満足度は高かった。さらに、団らんとプライバシーの満足度の間には相関関係が認められた。
- (5) 団らん及びコミュニケーションによって得るものについて見ると、コミュニケーションでは団らんよりも家族の絆が多く、団らんではコミュニケーションよりも楽しいひとときが多かった。団らんではよい雰囲気家族が仲良く楽しむことによって相互理解を得ており、コミュニケーションでは会話などによる意思伝達により家族間の相互理解を得、その結果家族の絆を深めるという役割をしていると考えられる。
- (6) 団らん空間に対して、食事空間、キッチン、個室とのつながりが求められており、特に子どもの年齢が低い程その傾向が強かった。家族の交流を重視したいと考える場合は、前もって、開放的で住宅全体につながりを持たせた計画をすることが必要であるといえよう。

本調査より、家族の交流を望んでいる人の割合は高く、団らん時間が少ない中で、家事行為や私的行為をしながら団らんに参加している状況が伺えた。家族の交流を重視した間取りが望ましいと考える人の割合は高いことから、今後は住宅全体がより開放的な計画になり、団らん空間の機能の多様性が広がっていくのではないかと考えられる。そのため、個室と団らん空間をいかに関連づけ、家族の気配がわかる間取りを検討していくかが課題となると考えられる。

本研究では主に親世代を対象として分析を行ったが、今後は、子ども世代の団らん意識を調査することにより、家庭内における団らんやコミュニケーションの現状をより深く検討し、望まれる住宅像について検討して行きたいと考えている。

## 引用文献

- (1) 河原由紀子 他：「家族の団楽の場と時間の考察～女子短期大学生における～」、日本インテリア学会第9回大会研究発表梗概集、p.36～37 (1997)
- (2) 北浦かほる：「家族のコミュニケーションと団らんのとらえ方に関する研究」、日本インテリア学会第11回大会研究発表梗概集、p.3～4 (1999)
- (3) 沢田知子：「集合住宅における就寝・私的生活行動の展開について～起居様式の動向および行動拠点の構成からみた行動環境としての住居の考察 (第2報)～」、日本建築学会計画系論文集第520号、p.115～122 (1999)
- (4) 本間博文 他：「住宅平面に投影された親子の交流

- ～住宅誌の掲載事例にみる住宅の平面構成の変化に関する研究～」、日本建築学会計画系論文集第533号、p.67～73 (2000)
- (5) 小西史子 他：「親子のコミュニケーションが中学生の「心の健康度」に及ぼす影響」、日本家政学会誌Vol.51、No.4、p.9～22 (2000)
  - (6) 長津美代子：「家族の個別化・凝集性と中学生の自尊感情」、日本家政学会誌Vol.52、No.11、p.23～36 (2001)
  - (7) 岡田みゆき：「教育的な意義を含む母子の会話と母親の要因との関連～小学生における食事時の母子の会話の実態調査から～」、日本家政学会誌Vol.52、No.4、p.11～20 (2001)
  - (8) 岡田みゆき：「中学生における食事時の親子の会話の実態～親子の会話における小学生から中学生への変化」、日本家政学会誌Vol.54、No.1、p.3～15 (2003)
  - (9) 太田さち 他：「団らん空間に影響を及ぼす緒要因に関する研究 (第2報) -主婦の意識を通してみた団らんの実態-」、日本家政学会誌Vol.40、No.1、p.69～73 (1989)
  - (11) 太田さち 他：「団らん空間に影響を及ぼす緒要因に関する研究 (第3報) -生活時間・生活行為からみた団らんの実態-」、日本家政学会誌Vol.40、No.1、p.145～150 (1990)
  - (12) 正岡さち：「団らんの現状と団らん空間のあり方に関する調査研究」、日本インテリア学会第16回大会研究発表梗概集、p.35～36 (2004)
  - (13) 水野谷武志：「主行動・同時行動についての新しい集計及び分析の試み～東京都世田谷区在住雇用労働者夫妻の生活時間調査から～」、北海学園大学経済学部経済論集第55巻、第4号、p.71～86 (2008)
  - (14) 「家族がずっと仲良しでいられる間取り」、月間ハウジング2002年4月号、RECRUIT社、p.49～56 (2002)
  - (15) 「住まい15章」、住まい15章研究会編、学術図書出版社、p.152～153 (1994)

